



劇映画のなかの万博

飯田卓
民博人類文明誌研究部

もうひとつの万博映画

二〇二五年に、大阪市此花区このはなくの夢洲ゆめしまで、日本の国際博覧会としては二〇年ぶりの大阪・関西万博が開かれる。いっぽうで、一九七〇年には、みんぱくの所在する万博記念公園の敷地で、日本で最初かつ最大の国際博覧会、大阪万博（日本万国博覧会）が開かれた。今から六年後の万博は、四十九年前の万博から何を継承し、何をあらたな挑戦と位置づけていくのか。万博をたんなる祭典に終わらせないためには、われわれ一人ひとりがこれから考えていく必要がある。大阪や日本に住んで万博のホストともいえるわれわれは、オリンピックでいえば選手にもあたるからだ。

このことを考えていくうえで、「公式長編記録映画 日本万国博」（谷口千吉監督、一九七二年）という映画はたいへん参考になるが、公式記録であるため、レンズの視野が万博会場の外にまで届くことはなく、同時代が抱えていた課題とのかかわりで万博を考察するには不十分だろう。そこで今回とりあげたいのは、第一作公開から今年で五〇年を迎える「男はつらいよ」の山田洋次が監督を務めた「家族」という映画である。

この映画は、「男はつらいよ」公開の翌年にあたる一九七〇年に、大阪万博の会場をロケ地のひとつとして撮影され、同じ年の二〇月に公開された。公開はもちろん、大めようとす妻に対して、夫は、独りででも新天地を開拓したいと告げる。結局、妻も夫を信頼し、二人の子どもを抱えてついでいくことになる。カメラは、主人公らの足取りを長崎県から北海道まで辿っているにすぎない。しかし、見知らぬ町とおりながら思わぬハプニングを経験し、将来に対しても不安を募らせながら歩みを進めていく主人公らを見て、観客は、主人公の不安とみずからが時代に対してもつ不安とを重ね合わせていく。

「男はつらいよ」をものした山田洋次ならば、この不安をもつと楽天的に描くこともできただろう。実際、映画の終わりでは、希望とともに新生活を営む主人公らのようすが描かれている。しかし、映画全体をとおして、観客は手に汗を握りながら事態の推移を見つめることになる。大都市における地下街や雑踏の魅力、ならびに工業地帯における巨大な工業技術を映像としては見せながら、目に見えにくい人の心のゆく末を問いかけるようなスタンスが、この映画からはつきりと感じられる。

万博と観光ブーム

このことをよく表現しているのが、笠智衆が演じる主人公の父親である。この老人は最初、福山に住む主人公の



大阪万博開催当時のにぎわい（撮影：野口昭雄）

阪万博が閉幕した九月一三日よりも後のことだが、閉幕直後ともいえる時期に映画を公開したのは、万博の記憶が鮮明なときにこそ映画で万博について問いかける意図があつたためではなかろうか。いわく、万博とは何だったのか、そして、それがテーマとした「人類の進歩と調和」とは何だったのかと。

新生活への不安と新時代への不安

石炭燃料から石油燃料への転換が進みつつあつたこの時期、産出量が減っていたであろう長崎の炭鉱に勤めていた主人公は、一念発起して北海道での酪農経営を志す。もちろん、まだ行ったことのない土地である。それを止めたのは、弟の世話になるつもりで主人公らとともに長崎を出るが、「東京物語」（小津安二郎監督、一九五三年）で笠が演じた老人と同様、厄介者扱いされて追いはられることになる。追いはらった弟自身、負い目を感じて兄に高額の餞別を渡すものの、まさしく家族のありかたがここで観客に問われる。主人公らは、新生活への不安と新時代への不安を共振させながら、導かれるように歩みを進めていく。

山田の「家族」は、小津の「東京物語」の基調を受けついで映画であり、極端にいえば、時代に即した描きかただけが小津映画と異なっているようだ。例えば、「東京物語」は尾道と東京が舞台であるのに対し、「家族」は長崎、福山、大阪、東京、青森、北海道へと舞台が変わっていく。後者におけるロードムービーの展開は、国鉄が主導した観光ブームが定着した時代だからこそ採りえた手法だと思ふ。

また、万博会場をはじめとして大阪の地下街や東京の満員電車、瀬戸内コンピナートなどの都市的情景を意識的に描写する点も、山田映画の特徴であり、スタジオでの演出を重視する小津映画と大きく異なる。小津の時代には、視覚的に迫力のあるモチーフが山田の時代ほど多くなかつたからだろう。「東京物語」の撮影時、東京タワーすらまだなかつたのだ。

山田の描いた当時の情景は、人類がそれまで経験したことがない巨大技術や大衆生活を反映しており、万博はその一例である。梅棹忠夫や岡本太郎のいいかたを借りれば、「へらばつなもの」の等身大の経験を、山田は複眼的に描いた。次の万博はわれわれにどのような経験をもたらすのか、山田を見習って今から考えておきたいものだ。

「家族」

1970年/日本/日本語/106分/DVDあり

監督：山田洋次

出演：倍賞千恵子、井川比佐志、笠智衆ほか

『家族』（1970年）
監督/山田洋次
写真提供/松竹